View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語の「ほめ」に関する研究の概観と展望
Author(s)	永田, 良太
Citation	広島大学日本語教育研究 , 31 : 1 - 9
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50904
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050904
Right	Copyright (c) 2021 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	

Hiroshima University Institutional Repository

日本語の「ほめ」に関する研究の概観と展望

永田良太

A Review of Research on Compliments in Japanese

Ryota NAGATA

キーワード：ほめ，談話，対人関係，日本語教育

1. 「ほめ」とは

ことばは情報を伝達する役割を果たすとともに，社会の中で人間関係を維持・構築する役割も果たす。そのような人間関係の維持・構築に関わる言語行為の一つに「ほめ」がある。Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論の観点から見れば，「ほめ」は相手の承認欲求を充たすポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの「聞き手に意識を向ける（Strategy1：Notice, attent to H(his interests, wants, needs, goods)）」に該当する。「ほめ」については，これまでさまざまな定義がなされてきたが，「ある対象に対して，送り手が肯定的に評価し，それを相手に伝える行為」であるという点で共通しており，その対象が相手もしくは相手に関わるものである場合には，ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能することになる。

「ほめ」は人間関係の維持・構築に関わる働きを持つため，学校や子育てといった教育の分野やビジネスコミュニケーションなど，人間関係が重視される分野でも多くの研究が行われてきているが，本稿においては，日本語教育に寄与することを目的として，主に言語学や日本語教育の観点から行われてきた「ほめ」についての研究を概観する。グローバル化が進む日本社会においては，日本語母語話者同士のコミュニケーションに加えて，日本語母語話者と日本語学習者によるコミュニケーションの機会も増加している。そこでの対人コミュニケーションを円滑に進めるためにも，日本語の「ほめ」や日本語学習者の「ほめ」の特徴を理解しておく必要があると言えよう。

以下においては，①「ほめ」の種類，②「ほめ」の表現，③「ほめ」の対象，④「ほめ」と対人関係，⑤「ほめ」への返答，⑥「ほめ」の連鎖，⑦「ほめ」の対照研究，⑧日本語学習者による「ほめ」,という観点から先行研究を整理し，残された課題について検討する。

2. 「ほめ」の種類

川口・蒲谷・坂本（1996）は，「ほめ」が行われる際の表現意図に着目して，「ほめ」を「実質ほめ」と「形式ほめ」に分類している。「実質ほめ」とは，相手や相手に関する事柄について高い評価を伝えることそれ自体に話者の意図が存在するものであり，先に述べたようなポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての役割を果たす。

ただし，「ほめ」の送り手側にそのような意図があったとしても，それによって必ずしも受け手が心地よくなるとは限らない。例えば，送り手が当該の対象を高く評価していても，それを受け手が評価の対象とされたくない場合には，不快な思いをさせることがある（山路，2006）。また，高く評価されたかどうかは，受け手が当該発話をどのように解釈するかと関わるため（大塚, 2014, 2017）, 相手に否定的に捉えられたり，「皮肉」，「嫌味」，「からかい」などとして解釈されたりすることもある（古川，2010；坂本・ナジェージダ，2017）。市川（2016）は「ほめ」が失敗する要因として，「相手に自信がない場合」，「金銭，性，年齢などのタブーとされているトピックが話題になっている場合」，「相手との関係性が疎である場合」を挙げている。また過剰な「ほめ」も，失敗に終わったり，皮肉と解釈されたりすることもある（山路，2004）。

日本語母語話者と日本語学習者のコミュニケーションにおいても，中国人日本語学習者が日本語母語話者に対して「ほめ」を行った場合，その多くはプラスや中立的に解釈されるが「ほめ」がマイナス評価されるこ

ともあるという。その一因として，日中の文化的規範の違い（「ほめ」に値するかどうかの文化的な違い）が存在することが指摘されている（袁，2012）。

次に，川口・蒲谷・坂本（1996）で指摘される「形式ほめ」について見る。「形式ほめ」とは，「実質ほめ」のように高い評価を伝えることよりも，それを伝えることによって，その後の会話を展開・発展させることに重きが置かれるものである。

談話や話題の開始部や終結部に「ほめ」が見られることが多くの先行研究で指摘されている（熊取谷，1989；小玉，1996；大野，2002b，2007a； 張，2014b）。会話の開始部に見られる「ほめ」には親密な会話に引き込むための「地ならし」の役割があると山路（2004）は指摘する。また，談話の始まりや話題転換といった「開始」に関わる部分には「外見」や「作品」といった物理的な対象についての「ほめ」が行われるのに対して，テーマの締めくくりや談話の終了部では，それまで話題とされていた相手の行動や性格についてまとめる形で「ほめ」が行われることが多い（大野，2002b）。

談話の展開以外に，特定の目的を達成するためにも「形式ほめ」が用いられる。例えば「後続する反論，批評などを和らげるため」や「後続する依頼を成功させるため」に用いられる（熊取谷，1989；坂本・ナジェージダ，2017）。大野（2003b）では，マイナス要素を含む内容や「依頼」，「要求」といった行動展開表現が先行する割合が「実質ほめ」の場合よりも高いことが指摘されている。また，大野（2003c）では後続要素にも着目されており，「形式ほめ」には相手のフェイスを脅かすような要素が後続することが多いことが明らかにされている。

3. 「ほめ」の表現

「ほめ」が行われる際の表現形式に関して，熊取谷（1989）は「対象物＋形容詞」，「形容詞＋対象物」，「対象物＋好み」に分類している。具体的には「良い」，「美しい」，「かっこいい」などの評価語彙が用いられることが多い。また，その際に呼びかけ詞が付加されることもある（笹井，2018）。「ほめ」として評価語彙が用いられる場合，評価語彙は言語によってイメージが異なるという点に留意する必要がある。例えば，「かわいい」は日本人にとって好ましいと評定されるが，「cute」はアメリカ人にとって好ましさが低いと評定されるという（小玉，1993）。

評価語彙以外にも，事実指摘，感情表明，羨望表明，お礼，お祝い・挨拶・決まり文句述べ（大野，2003a）や感謝，ねぎらい（坂本・ナジェージダ，2017），相手の価値をマイナス地点から引き上げる「慰め」や「励まし」の表現（伊藤，2011），「なるほど」（吉田，2019）なども「ほめ」として認められている。

4. 「ほめ」の対象

「ほめ」はある対象に対する肯定的な評価が伝えられるものであるが，「ほめ」の対象になるものとして，熊取谷（1989）では「才能，知識，技術」，「容姿，服装，所持品」，「努力」，「性格」に分類されている。「ほめ」の対象に関しては，林（2002）でも以下のものが挙げられている。

a. 外見（表情，体型，髪型，肌など）
b. 内面（性格，内面など）
c. 能力
・知的能力：語学力，話し方，ユーモア，発想，企画力，知識など
・身体的能力：体力，発音，発声，スポーツ能力，パワーなど
・芸術的能力：芸術作品，歌，楽器の演奏や絵による表現力など
d. 行動（仕事・家庭・他人などに関係する行為・行動）
e. 雰囲気（明るさ，ほがらかさ，やさしさ，清潔感，上品さなど）
f. 持ち物（装身具，持ち物，服装，車，土地や家屋，財産など）

熊取谷（1989）で指摘される「努力」については挙げられていないが，「行動」や「雰囲気」が「ほめ」の対象として挙げられている。さらに金（2005）では「外見の変化」や「遂行」も「ほめ」の対象として挙げられている。これらの対象は「ほめ」の受け手に関わるものであるが，古川（2000）は新聞や文庫に見られる「ほめ」を分析した結果，全体の 1 割ほどが受け手に直接関係しない対象についての「ほめ」であったという。古川（2000）はこれらを「第三者ほめ」と呼び，「ほめ手と受け手に共通の知人／物／事」，「ほめ手と受け手に関わらない人／物／事」，「ほめ手に関わる人／物／事」，「一般的なことがら」に分類している。また，古川（2002）によれば，人間関係が疎の関係の方が「第三者ほめ」が見られやすいという。

5. 「ほめ」と対人関係

小出（1998）は「ほめ」が成立するための条件として，表現主体と理解主体の人間関係を挙げており，「社会的立場」と「親疎関係」が適切でなければ，「ほめ」が違和感をもって受け取られるという。ここでの表現主体は本稿で言う「送り手」，理解主体は「受け手」に相当する。丸山（1996）では大学生を対象に調査した結果，地位が対等な場合の方が「ほめ」が見られやすいことが指摘されている。一方，古川（2003）は新聞や文庫に見られる「ほめ」を分析した結果，目上から目下に対する「ほめ」が全体の 56%を占めていたという。それぞれで分析された資料が異なるため，結果にも違いが見られるが，「ほめ」が社会的立場と関係していることがこれらの研究からうかがわれる。また，親疎関係に関して，古川（2003）では，親しい関係の場合における「ほめ」が全体の 77%を占めていたことが報告されている。

先に見た「ほめ」の対象や表現との関わりについて，大野（2003a）によれば，相手の「性格・行動」は人間関係に関わらず「ほめ」の対象になりやすいという。また，目上に対しては，相手の努力や能力・力量にもとづいた「作品」に対する「ほめ」が見られにくくなる一方で，「家族」など，相手の内面以外が「ほめ」の対象になりやすい。また，「ほめ」に用いられる評価表現に関しても，相手との関係性に応じて選択されることが明らかにされている。

6. 「ほめ」への返答

「ほめ」は受け手に対する送り手の肯定的な評価を表すものであるため，相手からの肯定的評価を受け入れることが望ましいという気持ちを受け手はもつ。その一方で，「ほめ」を受け入れることは，尊大な印象を相手に与えることにもつながりかねないため，それを拒否するべきだという葛藤状態に受け手は置かれることになる（Pomerants,1978）。熊取谷（1989）によれば，「ほめ」は Leech（1983）の「謙遜の原則」と「同意の原則」の拮抗状態を生み出すという。その場合，「謙遜の原則の優先」，「自画自賛の回避による受け入れ」，「問題解決の保留・回避」というストラテジーが取られることになる。このように，「ほめ」に対する返答の仕方も対人関係の維持・構築にとっては重要であるため，多くの研究が行われてきた。

張（2014c）は「ほめ」への返答について「焦点ずらし」という観点から考察している。会話の中で，自らや自らが属する場所についてポジティブな評価を受けた場合，それを否定したり，評価対象となっている能力・特性を持っていない自分を持ち出したりするといった形で，焦点をずらした応答をすることで，上に述べたような「ほめ」に対する応答のジレンマが解消されることになる。

「ほめ」に対する返答のスタイルに関して，寺尾（1996）は「受け入れ」，「打ち消し」，「その他」に分類している。このうち，「受け入れ」は「賛同の発言」，「感謝・喜び」，「控えめな同意・微笑み」，「ほめ返し」に細分類される。「打ち消し」は「不賛成の発言，しぐさ・自分に不利な情報の提示」，「的確さへの疑問」，「意図への疑い」に細分類される。また，「その他」には「シフト（他の人のおかげとする）」，「情報的コメント」，「無視・話を逸らす」，「会話の流れに沿って話が逸れる」，「ほめ言葉の内容の確認」，「冗談・おどけ・照れ」が含まれる。平田（1999）でも返答スタイルの分類が行われており，「否定」，「肯定」，「その他」に分類される点および「肯定」が「同意する」や「感謝・喜びを表わす」に細分類される点は共通するが，「否定」に「打ち消す＋ほめ返す」や「その他」として「疑問を投げかける」が含まれる点は異なる。西（2010）では，「受け入れ」や「打ち消し」に加えて，「混合型」，「態度保留型」という返答の型が見られることが指摘されている。

また，「ほめ」への返答には様々な社会言語学的要因が関わることも明らかにされている。上下関係に関して，大野（2005）は，シナリオを分析した結果，上下・同等・下上のいずれの関係においても回避型の応答が顕著に多かったことを報告している。また，否定型と受け入れ型に着目すると，いずれの人間関係においても受け入れ型の方が多かったという。その一方で，平田（1999）では，年下からほめられた場合には，同じ年齢もしくは年上の相手からほめられた場合に比べて，肯定でも否定でもない「その他」の回答の割合が高くなることが指摘されている。また，地位に関しても，目下からほめられた場合には否定して打ち消す例は見られず，同意や感謝・喜びの表出が見られることが多いという。

性差に関して，丸山（1996）は「ほめ」の受け入れの返答は同性同士の場合の方が異性の場合よりも多いことを指摘している。異性の場合には同性の場合よりも「ほめ」に対する否定的な返答が多くなるという。ただし，異性の場合には，どちらがほめるかということも関わり，女性にほめられた男性の返答としては同意と感謝の割合が高い（平田，1999）。

世代に関して，小池（2000）によれば，30 代では「否定・謙遜」の返答や「お礼」が他の世代よりも顕著に高

かったという。また22歳以下と23歳以上という年齢に着目したところ，23歳以上の方が「否定・謙遜」の返答が多かった。ここから「学生」か「社会人」かという社会的役割も返答に影響する可能性が示唆されている。

さらに，「ほめ」への返答は何がほめられるかといった「対象」によっても異なる。清水（2017）は「ほめ」の対象とそれに対する返答について調査を行っている。その結果，同等の親密な関係の相手から「容姿」がほめられた場合の受入れ型は26.7%と最も少なかったのに対して「家族の能力」をほめられた場合には51%が受け入れたことが明らかになった。ただし，「容姿」も二度ほめられると，受け入れの割合が高くなる。大野（2004）は非物理的対象に対するほめの受け入れは上下関係に関わるが，物理的対象に対するほめは相手との関係に関わらず，受け入れられやすいことを指摘している。「才能ほめ」に関して，上から下に対してほめられた場合には受け入れられやすく，「いい人」のように相手の全体をほめる「人ほめ」の場合には，下から上で否定型が多いという。大野（2007b）でも，「才能」がほめられた場合，相手が専門的に目上の立場である場合には受け入れられることが多いが，そうでない場合には謙遜されることが多い。また，「ほめ」が繰り返されると，謙遜の気持ちから，回避や受け入れが多くなることが指摘されている。

このように「ほめ」への返答には複数の型があり，様々な社会言語学的要因と関わりながら使い分けられているが，古川（2001）は日本語教科書では「ほめ」に対しては謙遜して否定的な応答を行うことが望ましいと過剰に一般化されていると指摘する。ただし，日本語教科書の中にも，「感謝の表出」や「ほめ返し」など，研究成果に則したほめの返答の仕方が提示されているものもある（中川，2004）。

7. 「ほめ」の連鎖

これまで見てきたように「ほめ」表現やそれに対する返答について多くの研究が行われてきているが，「ほめ」は会話の中で単独で用いられるわけではなく，先行連鎖や後続連鎖を構築する。熊取谷（1989）は「ほめ」の先行連鎖には「送り手主導型」と「受け手主導型」が存在することを指摘している。いずれの場合においても，先行連鎖では評価対象に関する質問や導入が行われ，その後の本連鎖における「ほめ」を誘発しているという。

後続連鎖に関して，熊取谷（1989）は「ほめ」の後続連鎖には「詳細情報の要求」と「ほめの増幅」が行われることが多いことを指摘している。大野（2002a）や金（2004）は「ほめ」の後続連鎖をほめ手と受け手のどちらが主導するかという観点から分析しており，ほめ手が主導する後続連鎖では「依頼」，「勧誘」，「ネガティブな話題」，「話題転換」，「再ほめ」，「情報要求」，「情報提供」が見られるという。一方，受け手が主導する後続連鎖には「関心を持つ」，「FTA」，「話題転換」，「アドバイス」，「情報提供」，「ほめ誘発」，「ほめ返し」が見られるという。

8. 「ほめ」の対照研究

これまでは日本語の「ほめ」に関する研究を「種類」，「表現」，「対象」，「対人関係」，「返答」，「連鎖」という観点からまとめてきたが，他の言語と対照することで，それぞれの特徴がより明らかになる。

表現に関して，金（2010）は日本と韓国の同性同士の会話を分析した結果，日本の女性は肯定的評価語のみでほめることが多いことを指摘している。また，王（2018）は日中の「ほめ」の談話を分析することで，日本ではほめられたことを感じさせないようにほめるのに対して，中国では明示的にほめるという違いがあると指摘している。

対象に関して，金（2005）は日韓の親しい同性の友人である大学生の談話に見られる「ほめ」を比較した結果，日本語母語話者は「遂行」，「行動」，「所持物」が高い割合で「ほめ」の対象になっていたのに対して，韓国語母語話者は「外見の変化」，「外見」，「遂行」，「所持物」の順に「ほめ」の対象になっていた。ここから，日韓のそれぞれの社会で何に肯定的な価値が置かれやすいかは異なることがわかる。韓国人が日本人よりも「外見」について「ほめ」を行いやすいことについては洪（2007）でも指摘されている。

関崎・金・趙（2017）は「ほめ」の対象に関して，日韓中の大学生にアンケートを行い，「ほめ」につながりやすい対象について分析している。その結果，「時間をきちんと守る」や「面倒見がよい」などの「対人関係因子」をもつ対象は，日本に比べて韓国と中国で「ほめ」につながりやすいことが明らかになった。また，「外国語がよくできる」や「スポーツ万能だ」などの「本人特有性因子」を持つ対象に関しては，「ほめ」へのつながりやすさに日韓中で違いが見られなかった。このように，「ほめ」につながりやすい対象には共通点と相違点が認められる。

対人関係に関して，金（2010）は日韓の同性同士の

会話における「ほめ」の出現頻度を調査した結果，韓女＞韓男＞日女＞日男の順に「ほめ」が見られ，特に「外見」をほめる場合にそのような傾向が見られるという。日韓ともに男性よりも女性の方が「外見」をほめることについては洪（2007）でも指摘されている。

「ほめ」への返答に関しては最も多く対照研究が行われている。柏木（2017）は日米のインタビュー談話に見られた「ほめ」を分析し，英語の方が日本語よりも「受け入れ型」の返答が多いことを指摘している。同じく，日本語と英語を対照した河原（2019）によれば，ほめに対する返答に関して，英語母語話者では「感謝」や「笑顔」が多いのに対して，日本語母語話者では「否定」が最も多いという違いがあるという。

日中を比較したものとして，梁（2009）は「ほめ」への返答に関して，日本語においては，回避＞複合＞否定＞肯定の順であるのに対して中国語においては，回避＞肯定＞複合＞否定の順に見られるという。また，「ほめ」の対象との関わりについて，「外見」と「身内」に関して，日本語では「肯定」の返答が一例も見られなかったのに対して中国語ではこれらに対しても「肯定」の返答が見られる。「容姿」をほめられた場合，中国では感謝が見られるのに対して，日本では「否定」という打ち消し型の応答が多いことは西（2010）でも指摘されている。増田（2009）は教育場面に着目して，教師からの「ほめ」への返答の仕方に関する日中の比較を行っている。その結果，発表やレポートなどの「能力」について教師からほめられた場合，日本では肯定的な返答が行われるのに対して，中国では回避や否定といった返答が見られることが多いという。また，「性格」に関しては，日中ともに否定的な返答がなされるという点で共通している。戸森（2018）は同級生から持ち物（カバン）をほめられた場合の返答について，日本では「感謝・喜び」といった肯定的な返答を単独で表す形が最も多いことを指摘している。一方，中国では同じ状況で複合型の「回避→肯定」といった返答が最も多く，次いで「感謝・喜び」が多かったという。このように，同じ状況における返答であっても，日本と中国では違いが見られる。ほめへの返答に関する適切さの判断に違いが生じることについて，王（2017）は「謙遜」や「照れ」の表し方，メンツへの認識の差異が日中で異なるためであると指摘する。

韓国語との対照について，金（2010）では韓国の女性は肯定的な返答が最も多いのに対して日本の女性では最も少ないという違いがあることが指摘されている。

サーヤン（2003，2009）は日本語母語話者とタイ語母語話者を比較した結果，どちらも回避型の返答スタイルが用いられることを指摘している。回避型は対等な関係の場合に特に多く見られ，上下ほめの場合には「ありがとうございます」という受け入れ型が日本でもタイでも多く見られるという（サーヤン，2003）。また，サーヤン（2009）では，日本では「受け入れ型＋回避型」のように組み合わせた返答が多いのに対してタイでは単独の返答が多いことが明らかにされている。

連鎖の観点からの対照研究として，金（2007）では日本語と韓国語のほめを談話の中で観察することで，韓国語よりも日本語の方が「ほめ」の先行連鎖が見られやすく，相手から導入された話題をほめにつなげる展開が見られることが明らかにされている。後続連鎖に関しては，日韓ともにほめ手が主導する場合が多い。受け手が主導する場合には，日本語では話題維持が多いのに対して韓国語では話題転換が多い。

9. 日本語学習者による「ほめ」

日本語学習者の「ほめ」についても，これまでに見た観点から研究が行われている。まず，「ほめ」の表現に関して，大野（2009a）は日本語母語話者と日本語学習者の目上への「ほめ」を比較している。その結果，「ほめ」の対象に関わらず，学習者の方が「ほめ」の方法が多く，強調する表現や多様な語によって「ほめ」を行っていることを明らかにしている。また，山口（2015）によれば，韓国人学習者は目上をほめる場合に，その対象となる相手に関することがらに直接言及することはせず，その場についての言及や自分の感想を述べることが多いのに対して，中国，台湾，タイの学習者は対象となる相手に関することがらに直接言及する場合が多いという。また，「ほめ」に用いられる評価語も学習者の母語によって異なり，中国とタイの学習者では，ほめに用いられる評価語とその評価語に対するイメージが異なることが報告されている。

「ほめ」への返答に関して，大野（2009b）は目上の相手からほめられた場合の返答について，日本語母語話者と日本語学習者を比較している。その結果，ほめの対象によって返答が異なり，「語学（専門）」がほめられた場合，母語話者は受入型が多く，学習者は否定型が多いが，「母親（家族）」がほめられた場合にはその傾向が逆になる。また，返答の際の表現に関して，学習者は「まだまだ」が多く使われることも指摘されている。

池田（2008）は，ほめられた相手に着目し，日本語学習者が，日本語母語話者からほめられた場合と日本

語学習者からほめられた場合の返答について分析している。日本語母語話者からほめられた場合には否定的情報・コメント付加が多いのに対して，日本語学習者からほめられた場合には「保留・確認・納得」の返答が多いという。このような返答の仕方の違いから，ほめに対して日本語母語話者は否定や謙虚な返答をすると日本語学習者が考え，自らも同様の返答を行っている可能性がある。

10. 今後の展望

本稿で見てきたように，日本語の「ほめ」に関しては，種類，表現，対象，対人関係，返答，連鎖という観点から分析が行われ，他言語とも対照することで，その特徴が明らかにされてきた。日本語教育の視点に立った時，「ほめ」の表現にとどまらず，「ほめ－返答」といった隣接ペアや先行連鎖・後続連鎖まで，その対象が拡大されていることも，実際の会話の中で「ほめ」を用いるためには重要である。大野（2007b）では謙遜の後にほめ返したり，それに対して相手もまた謙遜したりするなど，コミュニケーションレベルで相手と「同じであること」を示すことで仲間意識が保たれ，円滑なコミュニケーションが維持されることがある，と述べられている。ここから，実際に会話の中で「ほめ」を用いて人間関係を維持・構築するためには，分析対象をさらに拡大する必要性が示唆される。

永田（2014）は日本語母語話者同士の自由会話に見られる「ほめ」を分析している。その結果，片方の参加者から「ほめ」が行われた場合，ほめられた側がその後のトピック中で相手に「ほめ」を行うことや第三者に関するトピックで，お互いにほめ合うことが明らかにされている。ここから，永田（2014）は，談話全体を通して，「ほめ」によるフェイスバランスが保たれたり，特定の対象をほめ合うことで互いの連帯感が強化されたりしていると指摘する。一方，日本語母語話者との自由談話において，中国人日本語学習者にはそのような「ほめ」の使用が見られないことが永田（2016）で明らかにされている。

このように，談話全体を通して「ほめ」を分析することで，人間関係の維持・構築の働きがより明確になると同時に，日本語学習者にとっての課題も明らかになる。「ほめ」への返答に関して，日本語学習者は否定的応答や特定の表現（「まだまだです」）に偏る傾向があるが，そのような表現上の問題に加えて，会話全体を見通す視点が今後は求められるであろう。談話レベルでの「ほめ」の研究はこれまで特定の学習者や特定の種類の談話の分析にとどまっているため，今後は習熟度や母語の違い，さらには「非目的指向型－目的指向型」といった談話の種類を考慮した分析を行うことで，会話の中での「ほめ」の役割がより明確になると思われる。

また，その際には，張（2014a）や柏木（2017）で指摘されるように，非言語やパラ言語的情報も考慮する必要がある。柏木（2017）によれば，日本で「受け入れ」型が見られる場合には，視線を外してお辞儀をしたり，首を振ったりするなどの非言語行動が伴われるという。

これらの観点からの分析を通して，日本語母語話者および日本語学習者の「ほめ」の実態が明らかになり，日本語教育における会話指導がさらに充実することが期待される。

参考文献

池田真希子（2008）「「ほめに関する研究－日本語学習者のほめの返答－」『東京女子大学言語文化研究』（17），pp.1-15，東京女子大学.

市川真未（2016）「ほめが失敗する要因とストラテジーについて」『創価大学大学院紀要』（38），pp.165-183，創価大学大学院.

伊藤由希子（2011）「「ほめ」とはどのような言語行動か－コミュニケーション主体の意識に沿ったとらえ直しを目指して－」『待遇コミュニケーション研究』（8），pp.1-16，待遇コミュニケーション学会.

袁帥（2012）「日中接触場面における「ほめ」－中国人日本語学習者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に－」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』(248)，pp.107-122，千葉大学大学院人文社会科学研究科.

王欣（2017）「中国語と日本語の「ほめ」の返答に関する対照研究」『地球社会統合科学研究』（7），pp.1-20，九州大学大学院地球社会統合科学府.

王欣（2018）「日本語と中国語の「ほめ」の談話における後続連鎖－談話構造の観点から－」『地球社会統合科学研究』（9），pp.1-8，九州大学大学院地球社会統合科学府.

大塚生子（2014）「恋人たちのポライトネス　ほめ意図の推論とイン／ポライトネスの評価」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要．外国語編』5（1），pp.97-117，近畿大学全学共通教育機構教養・外国語教育センター.

大塚生子（2017）「恋人たちのポライトネス　パフォーマンスとしてのほめ／ほめ返答とイン／ポライトネスの評価」『大阪工業大学紀要』62（1），pp.31-43，大阪工業大学紀要委員会.
大野敬代（2002a）「politeness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』（9）-2，pp.187-197，早稲田大学大学院教育学研究科.
大野敬代（2002b）「談話中の位置、面識状況からみた「ほめ」の特徴－シナリオにおける談話分析より－」『日本語論叢』(3)，pp.13-24，日本語論叢の会.
大野敬代（2003a）「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について－シナリオにおける「働きかけ表現」として－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』（10）-2，pp.337-346，早稲田大学大学院教育学研究科.
大野敬代（2003b）「「形式ほめ」の条件について－シナリオ談話における先行要素の調査から－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊』（11）-1，pp.179-188，早稲田大学大学院教育学研究科.
大野敬代（2003c）「シナリオ談話における「形式ほめ」の特徴」『日本語論叢』（4），pp.61-72，日本語論叢の会.
大野敬代（2004）「待遇からみた「ほめ」の応答とその工夫－シナリオ談話における politeness ストラテジーとしての分析から－」『早稲田大学教育学部学術研究. 国語・国文学編』（52），pp.27-39，早稲田大学教育学部.
大野敬代（2005）「「ほめ」の意図と目上への応答について－シナリオ談話における待遇コミュニケーションとしての調査から－」『社会言語科学』7（2），pp.88-96，社会言語科学会.
大野敬代（2007a）「「ほめ意図表現」の枠組みと機能」『早稲田日本語研究』（16），pp.109-120，早稲田大学日本語学会.
大野敬代（2007b）「待遇コミュニケーションとしての日本語の謙遜－日本語教科書での扱いと談話分析による比較から－」『国際交流センター紀要』（1），pp.25-37，埼玉大学国際交流センター.
大野敬代（2009a）「日本語母語話者と学習者の目上への「ほめ」のあり方－アンケート調査の結果からみえる両者の配慮－」『早稲田日本語研究』(18)，pp.60-71，早稲田大学日本語学会.
大野敬代（2009b）「日本語母語話者と日本語学習者の「ほめ」の応答－表現と意図からの分析－」『国際交流センター紀要』（3），pp.35-48，埼玉大学国際交流センター.
柏木厚子（2017）「インタビュー番組におけるほめの返答の日米比較－非言語データも含めた発話分析－」『学苑』（919），pp.1-14，昭和女子大学近代文化研究所.
河原美紗恵（2019）「ほめ言葉の返答における日英語比較」『Immaculata』(23)，pp.26-34.
川口義一・蒲谷宏・坂本恵（1996）「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15（5），pp.13-22，明治書院.
金庚芬（2004）「日本語の「ほめの談話」に関する一考察」『桜美林国際学論集』（9），pp.77-92，桜美林大学大学院.
金庚芬（2005）「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』（124），pp.13-22，日本語教育学会.
金庚芬（2007）「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』10（1），pp.18-32，社会言語科学会.
金庚芬（2010）「日本語と韓国語の「ほめ」における男女差－親しい友人同士の会話をデータとして－」『明星大学研究紀要　人文学部』(46)，pp.83-94，明星大学.
熊取谷哲夫（1989）「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』（2），pp.97-108，広島大学教育学部日本語教育学科.
小池浩子（2000）「「ほめ」への返答に関する副次文化的比較：対人関係別，性別，世代間」『信州大学教育学部紀要』(100)，pp.47-55，信州大学教育学部.
小出美河子（1998）「理解主体から見たほめことば」『国語学研究と資料』（22），pp.15-27，国語学研究と資料の会.
小玉安恵（1993）「ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観－外見のトピックを中心に－」『言語文化と日本語教育』（6），pp.22-35，お茶の水女子大学日本言語文化学研究会.
小玉安恵（1996）「対談インタビューにおけるほめの機能（1）－会話者の役割とほめの談話における位置という観点から－」『日本語学』15（5），pp.59-67，明治書院.
サーヤン　コーサティアンウォン（2003）「ほめ言葉に対する返答スタイルの日タイ比較－全体的傾向と上下関係による返答スタイルの違いについて－」『日本語・日本文化研究』（13），pp.171-181，大阪外国語大学日本語講座.
サーヤン　コーサティアンウォン（2009）「ほめ言葉に

対する返答スタイルの日タイ比較－親疎関係による返答スタイルの違いについて－」『間谷論集』(3)，pp.147-164，日本語日本文化教育研究会編集員会.
坂本惠・ナジェージダ ウェインベルグ（2017）「ほめの諸相－日本語母語話者は何をほめと認識するか－」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』（43），pp.121-135，東京外国語大学留学生日本語教育センター.
笹井香（2018）「ほめあげる機能をもつ文－ほめあげ文について－」『日本文藝研究』70（1），pp.1-23，関西学院大学日本文学会.
清水由希（2017）「ほめ言葉に対する返答について」『国文目白』（56），pp.31-47，日本女子大学国語国文学会.
関崎博紀・金庚芬・趙海城（2017）「ほめの対象に働く価値観の日韓中比較－大学生へのアンケート調査の結果に対する因子分析を通して－」『社会言語科学』20（1），pp.161-175，社会言語科学会.
張承姫（2014a）「会話参与者の立場から分析する「ほめ」と「ほめの応答」－会話分析手法を用いた日韓ほめの分析－」『言語コミュニケーション文化』11(1)，pp.135-148，関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会.
張承姫（2014b）「初対面における「ほめ」と話題展開について」『言語・音声理解と対話処理研究会』71，pp.17-22，人工知能学会.
張承姫（2014c）「相互行為としてのほめとほめの応答－聞き手の焦点ずらしの応答に注目して－」『社会言語科学』17（1），pp.98-113，社会言語科学会.
寺尾留美（1996）「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』15（5），pp.81-88，明治書院.
戸森優季（2018）「日中における親しさの表し方に関する考察－ほめの返答に着目して－」『さいたま言語研究』（2），pp.1-11，埼玉大学大学院人文社会科学研究科日本語専攻内さいたま言語研究会
中川佳子（2004）「ほめの返答に重点を置いた教材開発の試み」『愛知産業大学日本語教育研究所紀要』（1），pp.73-85，愛知産業大学日本語教育研究所.
永田良太（2014）「談話のトピック展開から見た「ほめ」」『表現研究』（99），pp.30-39，表現学会.
永田良太（2016）「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」－中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として－」『語文と教育』(30)，pp.139-150，鳴門教育大学国語教育学会.
西香織（2010）「「ほめ」に対する応答の日中大学生比較」『北九州市立大学外国語学部紀要』（129），pp.73-95，北九州市立大学外国語学部.
林伸一（2002）「「ほめる・ほめられる」教育－ほめる対象，方向，範囲，内容，動機，効果などの分類試案－」『教育学研究紀要』48（2），pp.374-379，中国四国教育学会.
平田真美（1999）「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学生センター紀要』（6），pp.38-47，横浜国立大学留学生センター.
古川由理子（2000）「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』（10）pp.117-130，大阪外国語大学日本語講座.
古川由理子（2001）「言語機能導入への一試案－「ほめ」を中心に－」『日本語・日本文化研究』（11）pp.57-72，大阪外国語大学日本語講座.
古川由理子（2002）「「ほめ」の種類－受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に－」『日本語・日本文化研究』（12）pp.41-54，大阪外国語大学日本語講座.
古川由理子（2003）「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴－対人関係から見た「ほめ」の分析－」『日本語教育』（117），pp.33-42，日本語教育学会.
古川由理子（2010）「「ほめ」が皮肉や嫌味になる場合」『日本語・日本文化』（36）pp.45-57，大阪大学日本語日本文化教育センター.
洪珉杓（2007）「日韓両国人の言語行動の違い－ほめ行動意識の日韓比較－」『日本語学』26（3），pp.84-95，明治書院.
増田奈央（2009）「教師のほめに対する学生の返答の日中対照研究」『日本言語文化研究』（13），pp.106-121，日本言語文化研究会.
丸山明代（1996）「男と女とほめ－大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析－」『日本語学』15（5），pp.68-80，明治書院.
山口和代（2015）「留学生の「ほめ」にみられる社会・文化的価値観の影響」『アカデミア　人文・自然科学編：南山大学紀要』(10)，pp.137-150，南山大学.
山路奈保子（2004）「日本語の談話における「ほめ」の機能」『比較社会文化研究』（15），pp.109-118，九州大学大学院比較社会文化学府.
山路奈保子（2006）「日本語の「ほめ」についての一考察－「ほめ」を攻撃的に作用させる要因の分析－」『日本語教育』(130),pp.100-109，日本語教育学会.
吉田朱里（2019）「「ほめ」の機能に関する一考察」『埼玉大学国語教育論叢』（22），pp.27-35，埼玉大学国語教育学会.
梁興宇（2009）「言語行為「ほめ」に対する返答の社会言語学的考察－日本語話者と中国語話者の例－」

『国際文化研究』（16），pp.83-96. 東北大学.
Brown, P. and S. Levinson（1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.
Leech, Geoffrey（1983）*Principles of Pragmatics*, London: Longman.
Pomerantz, Anita（1978）"Compliments responses: Notes on the co-operation of multiple constraints," Schenkein ed., *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, New York: Academic Press, 115-132.